



近江の板碑

1. はじめに

板碑とは石造塔婆の一種で、主に板状の石材を用い、頂部を三角形にし、その下に2段の切り込みと、前方に突出した額部を作り、以下を身部として、下端に額部と対応する形の根部を設けたものを典形とします。身部には種子、真言、仏像や塔婆などが彫刻されています。

滋賀県下における板碑の特色は、鎌倉時代や南北朝時代の古いものが少ないことで、現在知られているものでは、わずか十数例しかありません。しかし、室町時代中・後期（15～16世紀）になると、五輪塔や阿弥陀坐像な

どを彫込んだ、高さ40～50cm程の小形板碑が県下全域で多量にみられるようになります。

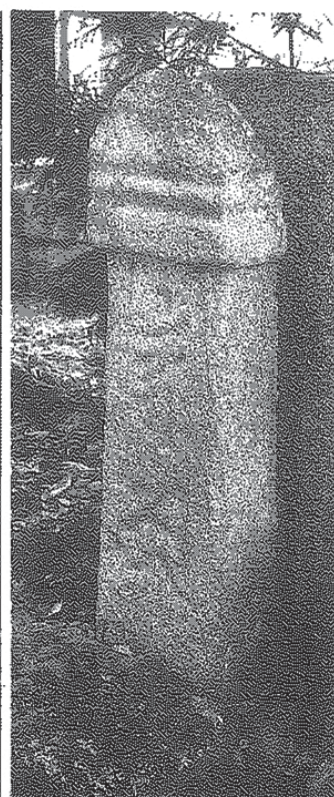
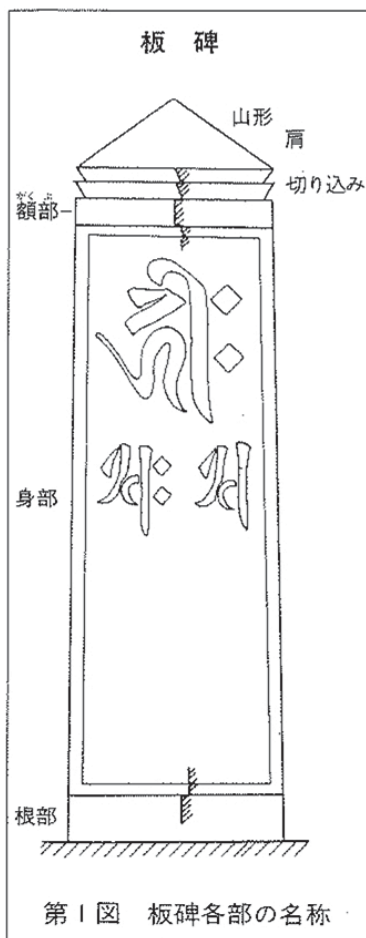
また、近世のはじめには、戒名を入れた墓標としての小形板碑や、1.5 mを越えるような大形の板碑も現われますが、元禄時代以降になると、墓標の定形化と共に急速に姿を消して行きます。

2. 県下の主要板碑

ここでは、近江の代表的な板碑を、構造の違いによる分類にそって、順に説明しましょう。

(1) 本格式板碑

大津市比叡山の無動寺にある、相応和上廟



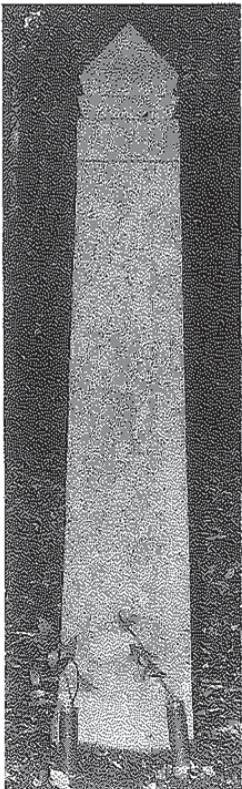
参道に立つ建長3年(1251)銘をもつ阿弥陀一尊種子板碑は、西日本最古の在銘板碑です。石材は花崗岩で、高さは80.5cm、頂部を山形に切り、正面の肩部に2条と両側面に1条の溝を彫込んでいます。正面上部の蓮華座上に“キリーク”(阿弥陀)を配し、その下の空間に建長三年十二月廿一日の銘文を陰彫しています。また、板石と同じ厚さで下端の中央に柄(へら)を作出しており、当初は基礎の上に建てられていたことがよく判ります。

これと同じ形態の板碑は、守山市水保にある観音寺に、虚空蔵種子板碑があります。この板碑も花崗岩製で、地上高は98cmあります。正面と両側面の肩部には、2条の溝が彫込まれています。正面上部にある月輪内には“タラク”(虚空蔵)を配し、その下に蓮華座が線刻してあります。種子の彫り方は、字画の幅に対して深さは浅く、一部薬研彫りしていますが、ほとんど籠字彫りの手法です。銘文はありませんが、鎌倉時代中期(1280年頃)を下らぬ時期のものと思われる。

同じ守山市の播磨田にある西蓮寺には、鎌倉時代後期(1310年頃)と考えられる阿弥陀一尊種子板碑があります。これも花崗岩製で、高さは84cmです。肩部より5cm下の、正面と両側面に一線を彫込んでいますが、先の2例に比較して退化した形式になっています。そしてその下に月輪を配し、月輪内に“キリーク”が刻まれています。種子は薬研彫りですが、彫りが浅く、正面の下半部は不整形な荒叩きのまま根部となっています。

(2) 碑伝形板碑

高島郡新旭町針江にある、日吉神社の金胎大日二尊種子板碑が近江で最古のものとして知られています。この板碑の構造上の特色は、同じ大きさの石材を2本継ぎ合わせて、3m以上の長大な板碑にしている点です。この板碑は花崗岩製で、上半部の先端が欠損しています。頂部は山形で、肩部の下に内側へ「く」の字状に削った2段の切込みを作っています。額部は突出し、身部の上に金剛界大日の“バン”、下に胎蔵界大日の“ア”が刻んであ



第5図 蒲生郡日野町村井
三尊種子板碑(延慶3年銘)

第6図 坂田郡伊吹町曲谷
白山神社板碑

第7図 大津市上仰木
小椋神社板碑郡(正安4年銘)



第8図 大津市坂本本町西教寺
名号板碑(天正10年銘)

ります。種子は薬研彫りですが、彫りは浅くなっています。下半部の根部は埋まっており、地上高は122 cmあります。全体に裾広がり、厚くなっています。下部には銘文が彫られているようですが、まだ十分に解読されていません。鎌倉時代後期(1306年頃)のものとして推定されています。

在銘のものでは、蒲生郡日野町村井の菅谷・社氏墓所にある、延慶3年(1310)銘三尊種子板碑が最も古いものです。この板碑は、地上高が215 cmある、裾広がり板碑です。額部の下に、三尊の種子が配してあり、その下に5行にわたり、

	二親幽霊並法界
カ(地藏)	衆生成仏得道也
キリーク	右率都婆志者為
ポロン	延慶三年十月十六日
(一字金輪)	願主内記重吉

の銘文が陰刻されています。

また、社氏墓所の延慶3年銘三尊種子板碑と、ほぼ同時期に造立されたと考えられる板碑が、坂田郡伊吹町^{新谷}の白山神社にあります。白山神社には、2基の碑伝形板碑がありますが、写真の向って右側の板碑がそれです。この板碑は花崗岩製で、高さは153.5 cmあり、裾広がりになっています。額部下方には、幅いっぱい舟形輪郭を彫り、半肉彫りの定印の阿弥陀坐像と蓮華座が彫出してあります。さらに下方には、種子が彫られています。また、下端には、基礎に建てるための柄^{ぼら}が造り出されています。

この他にも、犬上郡多賀町敏満寺にある、^{このみや}胡宮神社の^{げじょうせき}下乗石板碑が、鎌倉時代(1320年頃)のものと考えられています。また、栗太郡栗東町荒張にある、^{みかひつじ}金勝寺の胎蔵界大日一尊種子板碑が、南北朝時代(1390年頃)の例として知られています。

室町時代のもものでは、守山市田中の大日堂にある、花崗岩製の高さ73.5cmの阿弥陀種子一尊板碑が、中期のもの好例とされています。それ以後になると、高さが120~130cmと低くなる、退化形式の板碑が増えてきます。また後期になると、大津市田上里の西方寺の享禄4年(1531)、同田上^{まきのみつ}関津町の永禄元年(1558)、八日市市糖塚の地福寺の天文8年(1539)銘の板碑など、題目板碑も目立つようになってきます。

(3) 亜形式板碑

本格式板碑や碑伝形板碑に準ずるものを、この形式に含めます。県下には、この形式の板碑に特色のあるものがみられます。

大津市上仰木の小椋神社には、本殿の周辺に40基、境内社周辺に32基の2群からなる板碑群があります。花崗岩製で、形状は頂部を山形に切込んだだけの単純な形で、次に述べる2基を除いてすべて素面です。銘文を刻んだものはただ1基で、正安4年(1302)の銘があります。おそらく両群とも、同じころに立てられたものと考えられます。



第9図
伊香郡西浅井町大浦
双頭板碑



第10図 大津市西教寺
名号板碑(明応10年銘)

南北朝時代のものとしては、蒲生郡日野町の上野田にある正覚寺に、応安3年(1370)銘の名号板碑があります。これも花崗岩製で、高さは176cmです。頂部は截頭方形の方柱状になっており、正面には

西願聖靈三十三辺

キリーク 南無阿弥陀仏 右志者為

応安三年二月廿六日

と銘文を陰刻しています。

また、正面右側の額部の下に「タラーク」(宝生)、左側に「アク」(不空成就)の種子を刻んでいますが、背面には何も刻まれておらず、金剛界四仏の種子である「ウーン」(阿闍)は省略されています。

室町時代中期のものとしては、同じ日野町鎌掛の笹尾峠の東に明応9年(1500)銘の不動一尊種子板碑があります。石材は花崗岩製で、高さは204cmです。形状は方柱状で、額部正面に3段の浅い切込みをつくり、額部の下方に「カーンマン」(不動)の種子を配し、その下の左右と下部の中間に銘文が刻まれて

います。銘文については、石質が粗く、摩滅や欠損もあり完読することはできませんが、田岡香逸氏は次のように解説しています。

凡奉尋山伏之□□□如来之教勅三界縁□之尊主□怨祭□
□□也

カーンマン

明応九年^{庚申}十一月十三日与□

然則役行者旧例於□□出門□□止其煩可令勤過也仍執達
如件

(4) 自然石板碑

県下では、現在のところ自然石板碑の古い遺品はなく、中世末期の天文、天正年間のものが何例か知られているにすぎません。

ここでは一例として、大津市坂本本町にある西教寺の名号板碑を紹介しましょう。この板碑の形状は、先端がやや尖り気味で、全体に不整形なものとなっています。頂部には、わずかに浅い額部をつくり、その下に阿弥陀三尊の種子、名号、蓮華座を彫り、下部正面の右側に「秀岳宗光大禅定門」、左側に「天正十年六月十三日」の銘文を細字で陰刻しています。

(5) 多頭板碑

この形式の双頭板碑は、伊香郡西浅井町大浦の観音堂に、欠損したものが2基知られています。各々の頂部に、種子「ア」を並べて彫ったもので、室町時代末期のものとして推定されています。

(6) 五輪卒塔婆形板碑

板石を五輪卒塔婆形に作ったもので、年代の下る大形の板碑です。大津市西教寺には、明応10年(1501)銘の、高さ191.5cmのものがあり、各部には上から「キャ」「カ」「ラ」「バ」「ア」の種子を配し、地輪には種子の下に南無阿弥陀仏の名号と、下部正面の右側に「真盛上人^尊七廻」、左側に「明応十年二月晦日」の銘文を陰刻しています。また、大津市下阪本町の聖衆来迎寺にも、地上高が208.5cmある、永正7年(1510)銘のものがあり、共に花崗岩で作られています。

(兼康 保明氏 提供)